アヌココロ アイヌ イコロマケンル ソンコ 国立アイヌ民族博物館 ニュースレター アヌアヌ

vol.014 2023 NOV

ANUANU

基本展示室のこの展示を見て!
博物館 Pickup!
見て見て!園内サイン②
博物館の教育活動
調査研究最前線⑦
国立アイヌ民族博物館からのお知らせ
ウポポイってこんなとこ⑪

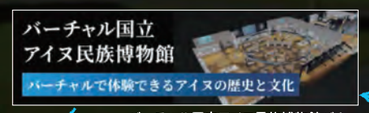
NATIONAL AINU MUSEUM

バーチャル博物館をアップデートしました！

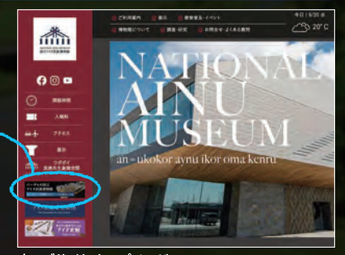
当館では来館が難しい方でもウェブ上で博物館の展示をご覧いただけるように、2021年に360度撮影などの先端技術を活用し、当館の展示や収蔵資料の一部をコンテンツ化したバーチャル博物館を作成しました。
2023年3月にはバーチャル博物館をアップデートし、
3Dモデル展示と音声によるテーマ別解説のコンテンツを追加しました。
世代を問わず、さまざまな方にバーチャル博物館をご覧いただくことで、
実際に足を運んでいただき、アイヌの歴史や文化を学ぶきっかけとなれば幸いです。

博物館ウェブサイトから3Dモデル展示と紹介動画をご覧いただけます

バーチャル博物館のトップへ



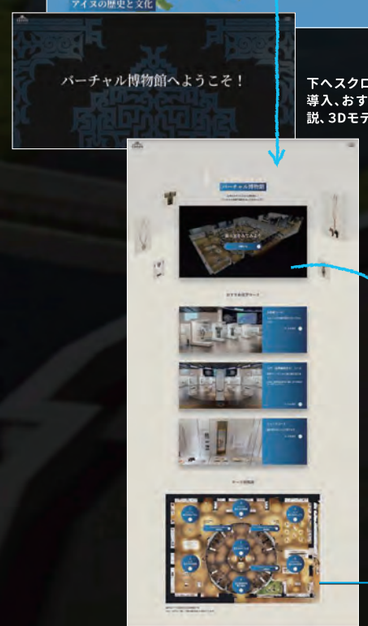
バーチャル国立アイヌ民族博物館バナー
ここをクリック



ウェブサイト トップページ

←スマートフォンからはこちら

展示室以外にも、館内のロビーやライブラリ、ミュージアムショップなどもご覧いただけます。



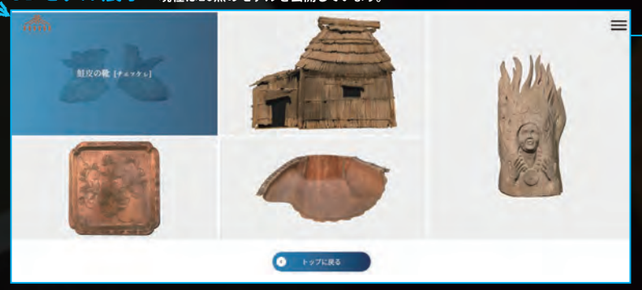
下へスクロールしていくと、展示室への導入、おすすめ見学コース、テーマ別解説、3Dモデル展示が表示されます

基本展示室の各テーマへ　3Dモデル展示室へ

いよいよ展示室へ！

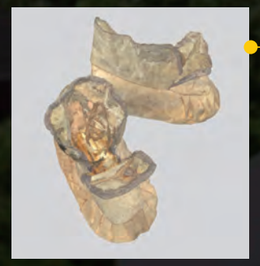
3Dモデル展示

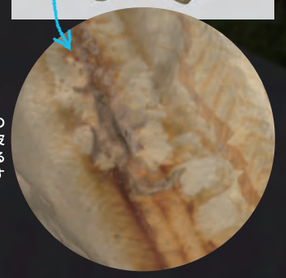
現在は10点のモデルを公開しています。



3Dコンテンツ

現在公開している10点のモデルをさまざまな角度から見ることができるコンテンツです。





靴底のうろこのようすなど、鮭皮の細部まで見ることができます

ウポポイPRキャラクター
トゥレッポん

テーマ別解説

新たにテーマ別のみどころと解説を追加しました。8つのテーマに分かれていて、音声と字幕で解説しています。なおテーマ別解説も、多言語対応となっており、各言語の音声吹込みも当館職員によるものです。

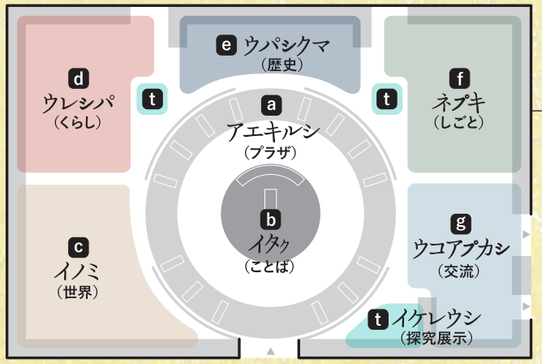
ウレシパ
私たちのくらし

イケレウシ テンパテンパ
探究展示

文化財保存の取り組み

イノミ
私たちの世界

基本展示室のこの展示を見て！



基本展示室で「かつてと現在」を知る展示

当館の基本展示は、「私たちのことば」「私たちの世界」「私たちのくらし」「私たちの歴史」「私たちのしごと」「私たちの交流」という6つのテーマから構成されています。それぞれのコーナーではそのコンセプトに沿った資料が展示されています。こうすると、「歴史」コーナー以外は時系列がないように思えますが、実はそれぞれのテーマごとにいわゆる「古い」資料から「新しい」資料までが展示されており、コーナーごとのかつてと現在を知ることができる展示にもなっています。今回は、こうした展示のいくつかを紹介します。

ウレシパ　「私たちのくらし」の衣服

このコーナーでは、くらしのなかの技術や道具について紹介しています。「今に受け継ぐ衣服と心」のテーマで、2点の衣服を並べて展示していますが、「華やかな装い」（左の着物）という解説文とともに、いわゆる伝統的な衣服を展示し、「受け継いできた人びと」（右の着物）では、製作技法などを学んだ現在の伝承者がつくった衣服を紹介しています。

ネプキ　「私たちのしごと」のさまざまなしごと

このコーナーではさまざまなしごとを紹介しています。「先祖のしごと」（写真左）では、近代以前のいわゆる伝統的な生業（なりわい）である狩猟、漁撈（ぎょろう）、農耕、採集などについて、使われてきた道具とともに紹介しています。「現代のしごと」（写真右）では、明治以降から現代に至るまで、俳優や測量技師などさまざまな職業に就いてきたことを紹介しています。

ウコアプカシ　「私たちの交流」の伝統を魅せる

このコーナーでは周辺の諸民族との交流について紹介しています。「伝統を魅せる」のコーナーでは、19世紀後半に始まった博覧会にアイヌ民族が出場したことを紹介する展示（写真中央・右）に始まり、アイヌ民族自らがアイヌ文化を紹介するための博物館をつくるなどしていたこと（写真左）を紹介しています。

※基本展示室は定期的に展示替えを行っているため、ここで紹介した資料が展示されていないことがあります。

ウポポイをより詳しく知るために

本書では、ウポポイができた経緯や現在の取り組みなどについて、ウポポイで働く13名が詳しく説明しています。博物館の基本展示のコンセプトや工夫したところなども詳しく書かれていますので、ぜひ手に取ってみてください。

『ウアイヌコロ コタン アカラ
ウポポイのことばと歴史』
（国書刊行会）
3,080円（税込）

博物館Pickup！　マレㇰ（突鉤）

国立アイヌ民族博物館の収蔵、展示資料をピックアップして紹介します。

川漁で使用する道具のなかに「マレㇰ」、あるいは「マレㇷ゚」などと呼ばれる漁具があります。これは川岸や丸木舟からサケやマスなどの魚を突いて捕獲するためのもので、本体は長さ40cmほどの棒状の台木と先端がとがったU字型の鉄鉤（てつかぎ）で構成されています。台木には縦に溝が掘られていて、溝の先端部には台木を貫通する穴が開いています。鉤には30cmほどの革紐（かわひも）や植物性の編紐（あみひも）が取り付けられ、この紐が台木の穴から底面を通り後部に縛り付けられています。使用する際には、この本体に2〜3mほどの木製の柄を取り付けます。

魚を捕獲する際には、鉤の紐が付いている部分を台木の溝にはめ込んで固定し、鉤の先端を魚体に向けて突きます。鉤が魚に刺さると台木から外れて反転し、魚が鉤に引っかかった状態で捕獲されるという仕組みになっています。つまり、マレㇰは「突く」と「引っかける」という銛（もり）と鉤の両方の要素を持った漁具といえるでしょう。

このマレㇰの特徴として、鉤自体が台木の先端より後方にあるので、浅瀬で突いたとしても鉤の先端が直接川底に当たらないため、破損することが少ないということがあげられます。また、鉤が反転することで魚が引っかかったままになり、暴れても外れにくいため、通常の使用では鉤の先端にストッパーとなる「返し」を必要としないのも特徴のひとつになります。このため、スムーズに魚を鉤から外すことができ、鉤を台木にセットすることですぐに次の漁に移れるので、効率的な漁が行えます。しかし、返しについては例外もあって、例えば、十勝地方に現存するマレㇰには、多くに返しがついています。この理由は定かではありませんが、十勝にはイトウやチョウザメといった大型の魚が生息していたため、これらを捕獲する際に鉤が外れにくいよう返しが付けられたのかもしれません。

当館では、「探究展示　テンパテンパ」にマレㇰでの魚の捕獲を体験できるコーナーがあり、ここで「突く」と「引っかける」というマレㇰの独特な動きを知ることができます。

（文化庁調査官　内田祐一）

漁撈でマレㇰ（突鉤）を使う様子

マレㇰ（突鉤）

探究展示 テンパテンパでのマレㇰ体験コーナー

ウポポイの園内サインをご紹介し、皆さまにより広くアイヌ語を知っていただくコーナーです！

見て見て！園内サイン②　イアシケウㇰ　導入展示

イアシケウㇰは「人を招待する」というアイヌ語です。より細かく見ると、イ「人」・アシケ「手」・ウㇰ「〜をとる」となります。アイヌ文化には、訪問客を家の中に招き入れるとき、儀礼の参列者を席に着かせるときなどに、相手の手をとって招き入れたり案内したりする習慣があります。導入展示は映像による展示ですから直接手をとって…とはいかないのですが、この導入展示に出てくる方々が来館者の皆さまを基本展示室の中へと招き入れてくれます。そこから、導入展示はイアシケウㇰと呼ばれることになりました。

ここで映されているアイヌ語とアイヌ文化をはじめ、いろいろな言葉による挨拶、自分も世界の中の一民族であることなどを感じとりながら、どうぞ中へお入りください。　（研究主査　中井貴規）

博物館の教育活動

Museum education at the National Ainu Museum

国立アイヌ民族博物館で行われている教育普及プログラムや、教育普及のツール、教育展示「探究展示 テンパテンパ」などについての話題を取り上げます。
今号は、東京都 霞が関で行われた子どもを対象としたイベントと当館で行われた教員向け研修会の様子をご紹介します。

教育普及活動報告

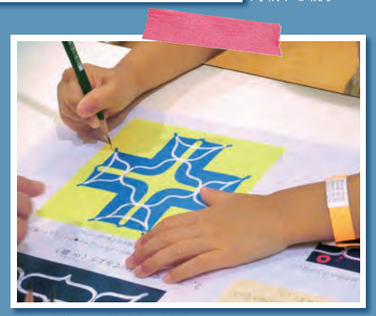
令和5年度 「こども霞が関見学デー」に参加しました

開催 2023年8月2日㈬～3日㈭

ウコニアシで対戦する親子

子どもたちに広く社会を知ってもらうことや政府の施策に対する理解を深めてもらうことを目的に、文部科学省や各府省庁等が連携して展示や解説などを行うイベントが東京都の霞が関で開催されました。

当館の出展ブース「国立アイヌ民族博物館がやってきた！」には、両日合計300名を超える子どもたちと保護者のかたがたが来場し、「アイヌ文様を描いてみよう」や、アイヌの子どもたちがむかし遊んでいたボードゲーム「ウコニアシ」、体験型展示「テンパテンパ出張版」の3つのコンテンツを体験してもらいました。どのコンテンツも親子で一緒に熱中する様子などが見られました。この体験を通してアイヌ文化や博物館を少しでも身近に感じてもらえていたら幸いです。　（エデュケーター　永石理恵）



アイヌ文様の一筆書きに挑戦

教員向け研修会

令和5年度 教員のための博物館の日 at 国立アイヌ民族博物館

開催 2023年7月31日㈪

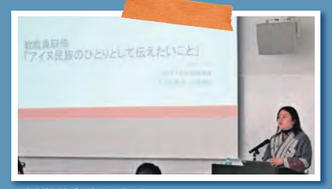
当館3回目となる教員向け研修会を開催し、43名の現地参加と16名のオンライン参加がありました。講話やディスカッションなどでは、当館や文化庁の職員がアイヌ民族に関する教育について説明し、参加者と意見交換を行いました。また、昨年度当館が制作した文部科学省の学習指導要領に則った動画教材を紹介し、小・中学校教員の方々に動画教材の活用例を話していただいた他、当館の学校での利用方法を説明しました。参加者からは、「アイヌ民族の歴史や文化を正しく伝える上での難しさや課題について、具体的に知ることができました。」などの声が寄せられました。

【プログラム】

- ●挨拶　佐々木 史郎（当館館長）
- ●講話　「アイヌ民族のひとりとして伝えたいこと」　八幡 巴絵（当館学芸主査）
- ●紹介　アイヌ民族に関する指導教材（動画教材）（当館制作・令和5年）
- ●説明　「学校教育における国立アイヌ民族博物館の活用方法」
- ●ディスカッション　「学校におけるアイヌ民族に関する教育の課題解決に向けて～国立アイヌ民族博物館と考える～」（現地のみ）
- ●展示室の見学（現地のみ・任意参加）

（研究員　市川暢子）

佐々木館長の挨拶



八幡学芸主査の講話

ディスカッション

当館の研究プロジェクトを中心とした研究成果を紹介します

調査研究最前線 7

Report 1

石田収蔵の野帳等資料を中心とした20世紀初頭の樺太先住民族の民族誌に関する文献研究

今日の博物館に伝わるアイヌ民族の資料は、誰が、どのような目的で、どのような経緯で収集したものなのでしょうか。本研究は、石田収蔵（1879–1940）という人物の日記、野帳、写真、葉書等の調査を通して、20世紀初頭の樺太先住民族資料の収集経緯について明らかにすることを目的に行われました。

石田収蔵は、20世紀前半に東京帝国大学の人類学教室に所属していた研究者で、生涯を通して計5回の樺太調査を行いました。撮影技術に長けており、アイヌ、ニヴフ、ウイルタの生活風景を多く写真に収めています。中にはホㇷ゚チリ（幼児の額飾り）をつけた子どもたちの写真があるなど、当時の生活と文化伝承を考える上で重要な記録を残しました。現在確認されているだけでも約3,000点ある石田資料の大部分は、板橋区立郷土資料館が所蔵しています。本研究は、同館の細桧雄貴学芸員に協力いただき、資料を整理・調査しました。

調査で分かった石田資料の意義の1つは、現地調査の案内を担ったアイヌやニヴフと石田の関係が分かる資料が豊富にある点です。例えば1917年8月の葉書には、ニヴフの案内人と敷香で合流し調査を共にした際のエピソードが綴られています。同時代に調査を行ったV.ヴァシーリエフの旅行記と比較すると、調査に関わった先住民族や和人の資料収集に対する阻止やためらい、スムーズにいくよう調整するというさまざまな行為が鮮明に現れてきます。このような資料を見ていくと、当時のコレクション形成史を案内者や所有者の視点から多角的に考えることにつながります。

（アソシエイトフェロー　是澤櫻子）

カメラをかまえる石田　板橋区立郷土資料館蔵

石田が撮影した子どもたち　アイヌ民族文化財団蔵

樺太調査にてニヴフの案内人と歩く（石田自筆のはがき）
1917年　板橋区立郷土資料館蔵

Report 2

アイヌ文化を画題とした絵画史料について －揺籃と終焉－

本調査では、アイヌの生活を描いた風俗画「アイヌ絵」の絵師、小玉貞良と平澤屏山に焦点をあて、基礎的な資料調査を行いました。

小玉貞良は18世紀中頃に松前で活躍し、アイヌ絵の先駆的な絵師といわれます。貞良は松前で生活し、アイヌの姿を見聞きした可能性が高いと考えられます。「蝦夷国風図絵」は、穴熊狩り、熊送り儀礼、酒宴、漁撈の様子を躍動的な人物描写とともに描いたもので、類例が数例確認できます。

平澤屏山は19世紀後半に函館で活躍し、アイヌの生活を実際に見て民具を精巧に描いたとされ、「蝦夷風俗十二ヶ月屏風」等は民族誌としても高く評価されています。

屏山没後も、弟子の木村巴江や木戸竹石らはアイヌ絵を制作し、1882年、1884年の内国絵画共進会等にアイヌを画題とした作品等を出品しています。同じ頃、函館に滞在した平福穂庵は屏山の作品等に影響を受け、アイヌ絵を制作しました。

函館では1879年に開拓使函館仮博物場が開場し、アイヌ資料等が展示されます。当館収蔵の「蝦夷島奇観」は、1892年に函館博物場の「蝦夷島奇観」（木村巴江作）をもとに制作されました。1870年代以降は写真でも北海道やアイヌの情報は紹介されますが、1880年代の函館ではアイヌ絵の制作が盛んで、1890年代でも「蝦夷島奇観」はアイヌ文化を知る史料として写本が制作されたことが分かります。

調査の成果は、基本展示室「私たちの交流」の展示に活用しました。それぞれの絵師と資料調査は新たな研究プロジェクトに継続し、現在も行っています。

（研究交流室長　霜村紀子）

アイヌ社頭　平福穂庵　国立アイヌ民族博物館収蔵
平澤屏山「蝦夷風俗十二ヶ月屏風」をもとに制作したと考えられます。

蝦夷島奇観　写本　国立アイヌ民族博物館収蔵
「明治廿五年六月函館博物館列品中ヨリ撮影」とあります。

国立アイヌ民族博物館からのお知らせ

National Ainu Museum 5th Seasonal Exhibition : A Night at the National Ainu Museum
国立アイヌ民族博物館第5回テーマ展示：ウポポイナイトミュージアム

本展覧会では、「おばけのマール」が案内人となり、いつもとは違う夜の世界をイメージした展示室でアイヌの文化と言葉に触れながら、ちょっとドキドキ、ワクワクするような、あなたにとっての新しい発見を探すミュージアム体験をお届けします。展覧会のなかでは、絵本『おばけのマールとすてきなことば』（中西出版株式会社）とクリエイティブカンパニー NAKED,INC.（ネイキッド）が手がける来場者の行動で映像が変化する体験型デジタルアート等、楽しみながらアイヌ語が学べる展示構成になっています。

絵本『おばけのマールとすてきなことば』（え・なかいれい、ぶん・けーたろう）は、「おばけのマール」シリーズ誕生15周年となる10作品目として、多言語版の『Marl the Ghost and Some Beautiful Words』とともに2020（令和2）年４月24日に発売しました。これはウポポイ（民族共生象徴空間）を舞台とした作品で、当館職員も制作に協力しました。

左：絵本『おばけのマールとすてきなことば』（え・なかいれい、ぶん・けーたろう）
右：多言語版の『Marl the Ghost and Some Beautiful Words』

【会　　場】国立アイヌ民族博物館　特別展示室
※本展覧会に合わせて基本展示室の照明も特別な仕様にいたします。

【会　　期】2023（令和5）年12月23日㊏～2024（令和6）年2月18日㊐（58日間）
※月曜日および2023（令和5）年12月29日㊎～2024（令和6）年1月3日㊌、1月9日㊋、2月13日㊋は閉館
※2024（令和6）年1月8日㊊、2月5日㊊、2月12日㊊は開館

【主催】国立アイヌ民族博物館　【特別協力】株式会社エイチ・アイ・エス、株式会社ネイキッド、中西出版株式会社　【後援】公益社団法人北海道アイヌ協会

詳しくは
テーマ展示のウェブサイトを
ご覧ください

ウポポイってこんなとこ 11

冬のウポポイはあたたかいチセでゆっくりと

寒さ厳しい冬は囲炉裏のそばで過ごしませんか？ 火を囲みながらお話を聞いたり、物語を楽しんだり、歌を歌ったり、アイヌ語を話してみたり。伝統的コタンのポロチセ、シノッ チセでお待ちしています。

コタンでの暮らしや、カムイとアイヌのつながりのお話を聞こう！

文化解説プログラム
「ウパシクマ」

ファミリー向けプログラム
「ポン劇場」

アイヌ語で語られる物語や叙情歌を楽しもう！

口承文芸実演「ネウサㇲアン ロ」

※プログラムの詳細はウポポイウェブサイトへ。

伝統的な歌「ウポポ」を一緒に歌おう！

芸能体験
「ウポポ アキ ロ」

日常的に使えるアイヌ語を楽しく学ぼう！

アイヌ語学習プログラム
「ピリカ！ ピンゴ アキ ロ」

アイヌ語学習プログラム
「アイヌイタカリ アイェ ロ」

ピックアップ 氷結のポロト湖

ウポポイに隣接するポロト湖は例年12月半ば頃から凍りはじめ、冬ならではの雄大な景色が楽しめます。

NATIONAL AINU MUSEUM
国立アイヌ民族博物館
https://nam.go.jp/

ウポポイ
NATIONAL AINU MUSEUM and PARK
民族共生象徴空間

■お問い合わせ
公益財団法人 アイヌ民族文化財団（ウポポイ内）
住　所：〒059-0902 北海道白老郡白老町若草町２丁目３番2号
電　話：0144-82-3914　FAX：0144-82-3685
メール：info@ainu-upopoy.jp

ウポポイにおける新型コロナウイルス感染拡大防止の取り組みや、プログラム等の詳しい情報はウポポイウェブサイトをご覧ください。

ウポポイ　検索
https://ainu-upopoy.jp/

※アヌアヌは、アイヌ語で「もしもし」の意味です

国立アイヌ民族博物館ニュースレター「アヌアヌ」第14号　編集・発行：国立アイヌ民族博物館　2023年11月発行　印刷：TOPPAN株式会社　ISSN 2435-8207